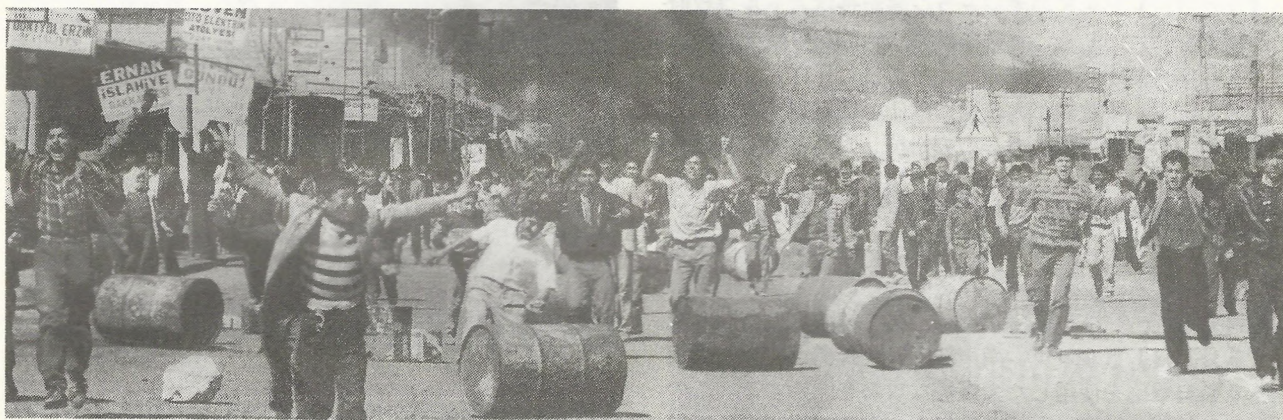


クルド労働者党 (P K K) 対トルコ全面戦争を宣言！



湾岸戦争以来、クルド問題は一般的に知られるようになった。そしてまた、そのクルドでは、人民の闘いも徐々に前進しつつある。マスコミでは、クルド人の闘争は「北部イラク地方での一部分的な蜂起」などとしてしか伝えられていないが、クルディスタン（クルドの地）は、5つの国々（アルメニア、シリア、イラク、イラン、トルコ）にまたがっている。

イラク地方クルディスタンのKDP（クルド民主党）は、南部クルディスタンにおける「自治」は展望しておらず、イラク国境線固定化問題にも反対の立場をとっていない。また別のクルド人グループPUK（クルド愛国同盟）もKDPと同様の見解を表明している。PUKリーダー、ジャジャール・タラバニは「クルディスタンを

とりまく5ヵ国の国境線の変更が可能であると考えている者などほとんどいない」などと述べている。

しかし、クルディスタンには「自治」だけでなく、民族自決、全クルディスタン独立を要求する人民の民族解放闘争がしっかりと存在しているのだ。

過去、さまざまな形でクルド解放闘争が闘われてきたが、1970年代にはじめて、PKK（Patria Karkeren Kurdistan＝クルド労働者党）が、民族自決を闘争目標としてかかげたのであった。PKKは、1978年の「11・27宣言」でクルド革命を「民族解放と民主主義の2つを基軸とした闘い」と位置づけ、「トルコ国家のいかなる植民地支配政策をも許さず、自給自足経済を確立し、全クルディスタン統一へ向け闘いぬく」ことが革命勢力の任務であるとした。

1984年PKKは、「ファシストの植民支配に終止符をうち、クルド人民の民族、社会解放闘争を前進させる」ことを目的として、HRK（クルド解放ユニット）を組織した。1985年、ERNK（クルド民族解放戦線）を結成し、「北西クルディスタンでのクルド人民の闘いを、クルド民族解放闘争へと領導する」としたメッセージを



ARGK（PKKの軍事組織）のゲリラ戦士たち

〈今号の内容〉

- ★クルディスタンをめぐる最近の動き
- ★PKK 2.22声明
- ★オスマン・オジャラン、インタビュー
- ★ドイツ赤軍派(RAF) 3.30声明
- ★ヴァイターシュタット拘置所爆破ドキュメント



発表した。

1986年PKKは、トルコ軍への軍事作戦攻撃を展開するため、ARGK（クルド人民解放軍）の建軍へといたっている。その武装勢力は約一万人、トルコ域内に居住する一千万人のクルド人民のほとんどはPKKを支える人民の海である。

一昨年来トルコ政府は、PKKに対する攻撃を強めており、91年秋にはイラク領内にまで侵入して、PKKの拠点に対する大攻勢をかけた。無差別爆撃によってクルドの村が多数破壊され、死者の数も膨大なものとなった。

クルディスタンをめぐる最近の動き

【3月27日】PKKのオジャラン書記長は、トルコ政府が和平交渉に応じることを条件に一方的な停戦を表明。

【5月16日】オザル大統領が4月17日に死亡した後を受けて、デミレル首相が大統領に就任。デミレルはクルディスタンの独立運動に対し力で対抗しようとする強硬派。このため、減少していたPKKに対するトルコ軍の攻撃が激化する。

【5月24日】PKKのゲリラ部隊が、トルコ南東部ビンゴル付近でトルコ軍兵士を移送中のバスを襲撃。38人を殺害する。

【5月30日】トルコ軍、南東部のPKK拠点に対し武装ヘリや迫撃砲を使用した大規模な攻勢を開始する。この日PKK側の被害は死傷50人以上、トルコ軍側の死者は3人と発表されている。

【6月4～5日】トルコ軍による第二波の大規模攻撃。F1ファントム戦闘機による爆撃を伴う。トルコ側はPKKゲリラ22人を殺害と発表。

トルコ軍の攻撃は従来通り、拠点の村を全て焼き払い住民を含めて全てを殺害しようとするクルド人皆殺し作戦である。



トルコ軍によって虐殺された子供

【6月8日】PKKのオジャラン書記長はレバノンのバーエリアスで記者会見を行い、トルコ政府に対し全面的な戦争を宣言した。書記長は「トルコの経済的、観光的地点を標的として徹底的に戦う。我々は1万人以上の戦闘員を動員し、武装闘争に全力を挙げる。トルコ政府は、この警告をしっかりと受けとめなければならない。彼らはクルディスタンの村々を破壊した。我々はこれに報復するのだ。何万人もの犠牲者がでるだろう」と述べた。

国連の援助を期待し、限定的な自治の獲得を目標とするKDPなどはトルコによる攻撃を恐れ、PKKに圧力をかけるといった状況も生じている。

昨年秋からのトルコ政府による大規模攻勢に際しては、トルコ政府と取り引きをしたKDPとPUKがPKKを攻撃するといった事態にまで至った。

今年2月、PKKはトルコの観光産業への攻撃を宣言。さらに6月には、トルコへの全面戦争を開始することを明らかにした。クルディスタン解放の闘いは、重要な局面を迎えている。



トルコ大使館前でクルド人を逮捕する警官隊（ドイツ）

【6月24日】欧州各国にある領事館などトルコ政府の施設、旅行代理店をPKKのメンバーやデモ隊が襲撃。ミュンヘン、ケルン、フランクフルト、マルセイユ、ジュネーブ、チューリヒ、コペンハーゲン、ストックホルム、ベルンなど5ヵ国、29都市にわたる一斉蜂起となった。

ミュンヘン（ドイツ）のトルコ領事館は24日朝、PKKのメンバーによって占拠された。戦士たちは、ドイツのコール首相が26日朝までにテレビでトルコ政府に対しクルド人への弾圧をやめるよう呼びかけることを要求、しかしドイツ政府はこれを拒否。夜になって占拠戦士13人が投降。ベルンではトルコ大使館前のクルド人デモ隊に対し治安部隊が発砲し、1人が死亡する。マルセイユでもトルコ領事館を占拠した。

同日、PKKの宣伝部「クルド通信」は声明を発表し、①ドイツ政府のトルコ政府への武器援助停止、②トルコ政府のPKKへの軍事攻撃の停止、③世界はクルド人虐殺に対して抗議の声をあげよ、との要求を明らかにする。昨年、ドイツ政府はトルコ政府がドイツ製兵器をクルド人弾圧に利用しているとし、3ヶ月だけトルコへの武器輸出を停止したこともある。

【6月27日】トルコ南西部のリゾート地アンタリアの外国人宿泊施設の庭に爆弾が投げ込まれた。ドイツ、スウェーデンからの観光客ら26人が負傷し、うち3人が重傷。また、これから5分後、市内のホテルに仕掛けられた爆弾が爆発し、爆風や飛び散った破片で車2台が大破した。

翌28日、ドイツ政府は「トルコへの旅行を自粛するように」との外務省コメントを発表。

PKK2.22声明

我々は観光産業に対して断固たる攻撃を遂行する

PKKは、トルコの戦時経済に不可欠な領域、トルコならびにクルディスタンのいわゆる観光施設に対して、断固たる戦闘を遂行することを決定した。

PKKの指導のもとで、クルド人民は自由のために闘い続けている。全世界的に明らかなように、クルド人民に対して不正義の戦争が行われている。この戦争において、トルコ政府はもっとも非人間的かつ不法な手段を使うことをやめようとしな。その歴史を通じて、トルコ政府は、自国民そして隣国の人々に殺人、拷問、圧迫、苦しみ以外の何もかもたらさなかった。クルド人民の最も基本的な権利や自由が、絶えず血にまみれていることに疑問の余地はない。何千もの人々が監獄に閉じ込められ、人間の尊厳を奪われている。街は焼かれ村は跡形もなく破壊され、女性や子どもまで皆殺しにされているのだ。毎日、無辜の人民が、政府に後押しされたヒズビ・コントラ、いわゆるコントラゲリラに殺されている。

クルド人民は、かつてないほど自由の達成に近づいている。トルコ政府は、それを破壊するため、今まで以上の攻撃を加えているのだ。クルド人民に対しあらゆる残虐な手段を行使するトルコ政府は、世界が「沈黙」しているのをいいことに、今日もまた、クルド人の死体を生み出している。

クルド人民は自らの未来を決める自由を求める。残酷で邪悪な戦争に直面する人民は、生存か滅亡のどちらかしかないと感じているのだ。

今日、全クルディスタンとトルコは戦火に包まれている。1993年、この戦争は更に激化するだろう。これは、多くの理由から避けがたい事なのだ。

クルド人民は、戦争に生き残り血塗られた独裁から解放されるのか、我が人民の滅亡かという岐路に立っている。ヨーロッパ諸国家と機関は、クルド問題の解決策として戦闘停止のための提案を行った。PKKは常に、それらの提案を諸手を挙げて歓迎してきた。トルコ政府は、これらの和平案を拒否しつづけ軍事的圧迫が唯一の解決だと主張する立場を今もって変えようとはしていない。

これらの理由によって、クルド人民の防衛においては、あらゆる有効な手段を行使する必要がある。クルド人民

(2 ページからつづく)

【6月28日】トルコ南東部で、PKKが列車に武装攻撃。6人が負傷。

【7月3日】トルコ南東部でPKKゲリラ部隊がトルコ軍憲兵隊兵舎を攻撃し、トルコ軍側に16人の死者。これに対しトルコ軍当局は「PKKに対する断固とした戦い」を宣言した。

またドイツ、ハノーバーではクルド人、支援者5000人がデモ。「クルディスタン解放」と、6月24日の大使館占拠などの連続行動で逮捕、拘留されている同胞の即時釈放を訴えた。この他フランクフルト、ハンブルグ、ケルンでも同様のデモ。

THINKING OF A HOLIDAY IN TURKEY?

BALANCE SHEET OF

ATROCITIES

COMMITTED BY TURKISH STATE
IN KURDISTAN IN 1992:

- 20.000 people arrested
- 680 civilians killed by death squads
- 320 villages burnt and depopulated
- 14 journalists killed by out of hand
- 5 towns bombed for days on end

Every pound you spend in Turkey
costs a life

Boycot the tourism to Turkey!

ERNK (National Liberation Front of Kurdistan)

トルコ観光のボイコットを呼びかけるポスター

は、トルコ国家によって破壊をともなった脅迫を受けているのだ。PKKは他の手段を選択することはできない。とりわけトルコ国家がもっとも依存している分野において、トルコ経済を混乱させるあらゆる手段を検討中である。「観光産業」がクルド人民への戦争攻撃の重要な財源となっているのだ。以下の地域がとりわけ危険である。エーゲ海、地中海、マルマラ海の周辺、そしてクルディスタンについては言うまでもない。観光地、ホテル、ビーチその他の設備も危険である。世界中からの「罪のない」多くの旅行者、度々トルコを訪れるヨーロッパの旅行者の生命は危険にさらされざるを得ない。我々はこれを避ける事は出来ないのだ。トルコ政府と観光代理店は、戦争を覆い隠さんとする活発な宣伝を始めるに違いない。彼らの主要な関心は、彼ら自身の経済的利害にあり、人間の生命にはないのだ。

我々としては、自由と平和を愛するヨーロッパその他の人々に、トルコへの旅行が極めて危険であることを考慮するよう警告したい。これはすべて、トルコによって行われている残忍な戦争に原因があるのだ。

以上の警告にもとづき、目標に対して行使された、爆弾、火炎ビン、その他の攻撃によって生じた被害について、我々は責任をとることは出来ない。もちろんその攻撃の結果いくらかの生命が奪われてもである。この戦争が終わるのか否かは、トルコ政府の態度いかににかかっていることなのだ。

オスマン・オジャラン インタビュー

(P K K 中央委員、ジレ・キャンプ司令官)

これは、P K Kがイラク北部地区内に新たに設置したジレ・キャンプで、トルコ日刊紙「ハリエツ」記者のインタビューに応じたものである。(昨年12月21～22日)

ジレ・キャンプはイラン・イラク国境に位置しており山を隔てた反対側からは毎日のようにイラン側からの砲撃がある。あるP K K戦闘員は「イランは我々に自分たちの存在を誇示せんとしているんだ」と語った。

オジャラン議長は、まず次のように述べた。

「戦いは今後も継続するだろう。しかし我々がいちばん望んでいるのは、これ以上多くの血を流したくない、ということだ」。オスマン・オジャランはP K Kリーダーアブドゥル・オジャランの弟でもある。

「トルコ国家の弾圧政策には徹底して戦うが、これはトルコ人民を敵にまわすということではない。トルコ人民とは友好的な関係をつくりたい」と、インタビューの中で彼は何度も強調した。

「(トルコ国家が)クルド抹殺攻撃をやめないというのなら、これから戦闘を続ける。以前、P K Kにはハキ・カレル、カマル・ピルなどトルコ人の同志もあり、重要な役割を果たしてくれていた」。

「トルコ国家による、その弾圧政策下においてオスマン・オジャランという存在はクルド人にとって重要なものとなっていった。言いかえれば、トルコ国家が現在の自分をつくりあげたのだ」と、オジャランは述べた。

【ハリエツ紙(以下Qと略)】メフメット・アリ・ビラントの「32日めに」という番組(トルコ民放による時事問題を扱ったテレビ番組)の中で、トルコ軍事独裁政権の強圧下でもP K Kの力、そしてその武装勢力は一度たりとも衰えたことなどなく、キャンプでは日常生活を送っていたと述べておられますが、のちにオズグル・グンデム紙には、正面戦をもって戦うことは誤りであったとも語っておられます。率直にうかがいたい点は、この間の一連のキャンプ、兵力、武器などにおける具体的な



ARGKのゲリラ戦士たち



山中を行軍するARGKの女性部隊

ダメージは実際の程度なのでしょうか。

【オスマン・オジャラン(以下オジャラン)】我々あるいは敵にとっても、この問題は戦争の性格を捉えることで明らかとなるだろう。具体的な損害は、同志 150名を失ったこと、そして他の多くも負傷している。また武器や装備も被害を受けている。この状況が実際に深刻な影響を与えているかどうかは議論のポイントとなるが、我々にとってはこのダメージは予想されていた程度のものと思っている。

オズグル・グンデム紙に語ったのは『正面戦として戦闘をかまえるべきではなく、我々の戦争形態はゲリラ戦を軸に戦闘を遂行すべきであった』ということである。これによって我々が現在最悪の事態を迎えているというわけではない。もしゲリラ戦をもって戦っていたなら、トルコ軍やクルディスタンを取りまく軍事包囲網に、より大きなダメージを与えることができていたということである。

そして、強調しておかなければならないが、受けたダメージを深刻にとらえることが、敵の強力な攻撃の前に屈するという決意ではない。我々を抹殺するために敵—トルコ軍は北から南にわたる全ての前線にかけて攻撃を激化させてきた。この中において彼らが勝利してきたとは言えない。トルコ軍、そしてその最前線の対クルド部隊では、士気は低下しており、我々は精神的に大きなダメージを与えていると認識している。

【Q】最近、あなたの兄のアブドゥル・オジャラン氏は地元の、あるいは外国各報道機関のインタビューに答えて、「以前は地下にとどまっていることを希望していた」と語っておられましたが、現在大衆に訴えるといった方針をとりはじめたことは（PKKを）合法化させようという狙いがあるのでしょうか。もしそうであればどのようにすれば一般に認められうるか？

【オジャラン】1988年以前、我々がすでにマスコミとコンタクトをもっていたという点で、そちらの質問には多少の誤解があるようだ。我々がこの間公然と登場するようになったということは、すなわち我々の闘いが前進を勝ちとり、発展してきたからなのだ。

とりわけ1988年、我々は様々な面で確固とした勝利を勝ちとった。これをふまえて我々は、闘争が広く大衆に訴えるものとなるべく心がけてきた。88～91年にかけてはトルコも含めた、より多くの報道機関と接する機会を設けた。しかしながらトルコの一部の挑発的なマスコミは「戦争あおり屋」的アプローチをもって我々に対応してきたため、一定程度、関係を切らざるをえなくなってしまった。我々は大衆と距離をおいたわけではないのだ。非難はクルド、トルコ両人民の友好を分断せんとする一部のマスコミに対してこそ向けられるべきものである。これは一方的に戦争を煽りたてるだけのものでしかない。よって、特に外国プレスに対して発表した我々の声明と、我々が合法化する、しない云々に関する問題とは何の関係もないことである。

我々は戦争を「選択」したのではない。戦争以外には何の方法も残されてはいなかった。戦わざるをえなかったのだ。トルコ国家は、クルド人民の基本的人権、あるいは民主的、政治的、民族的諸権利を認めようとはせず、これにことごとく破壊攻撃を加えてきた。このため我々は武装闘争をもって戦うしかなかったのだ。

もし他の政治的な手段を選択する機会があったなら、戦争という手段には訴えてはいなかったであろう。むしろ政治的な場で闘いたかったがトルコ国家の反民主的な性格 — その強圧政策と、クルド問題の存在の一切を無視しクルド人民の民族的固有性を徹底して破壊せんとする政策 — のなかで、我々には他の選択など残されてはいなかった。クルド人民が基本的人権、民族的諸権利を主張できる政治的な場を認めようとしないトルコ国家に



トルコ軍によって虐殺されたゲリラ戦士たち

対して、今日もまた我々は武装闘争を戦わねばならない。

トルコ国家が政治的解決策を提起し、明確にその準備ができたことを示してくれるのなら、我々はいつでも政治的闘争としての手段を選択するであろう。

【Q】最近、あなたとインタビューするためにジャーナリストの一群がキャンプへと向かいましたが、あなたがたはこれを受け入れず、追い返しています。

この理由は？

【オジャラン】この27名のジャーナリストはすべてトルコ国家から送られてきた者たちだ。これは「32日めに」の番組スタッフ担当者の責任である。彼らはこの番組をさしさわりのない内容にすべく様々な操作をおこなった。これにはトルコ軍の対クルド前線司令部が介入していたのは明らかであった。この番組はニセモノということになってしまおうだろう。

よって我々はこれに関連したジャーナリストの受け入れを拒否したのだ。人民や軍隊をデッチ上げの内容をもって一つの方向へ煽りたてる報道とは、トルコ人民、クルド人民のためのものではない。だがもし「32日めに」という番組でマスコミが、その行為を自らはっきりと示してくれるのなら、我々もメディアとは良好な関係が持てるかもしれない。



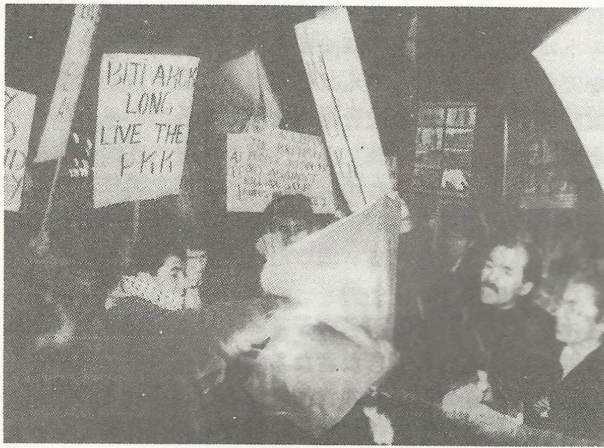
綿花つみをするクルドの女性たち

【Q】どのような条件であれば、停戦に合意されますか。

【オジャラン】クルディスタンでの戦争に巨額の戦費を投じることが、トルコのインフレを悪化させる要因ともなっている。戦争を継続することは人民の生活水準を落とし込め続けるということである。戦いやまた別の理由で失った多くの生命を通して我々自身も他の手段を選択することを望んでいる。

もしトルコ国家がクルド抹殺攻撃をやめ、それに代わってトルコ、クルド両人民の友好関係の原則のもとに政治的解決の道を探ろうというのなら、我々は停戦に合意し、政治的手段による解決策を選択していくことは可能である。

【Q】ペシュメルガに展開する部隊（おもにイラク領内で活動するKDP、PUKなどの勢力）との関係は？北部イラクのクルド関係者はあなたがたのことを「捕われの身」と呼んでいます。あなたがたはそうではない



デミレル・トルコ首相（当時）の訪英に反対して
トルコ国旗を燃やすクルド人デモ隊（1993、イギリス）

とおっしゃっておられますが、実際の状況は？

【オジャラン】南北国境線をまたいだ戦争は、状況をより鮮明に映しだしている。KDPとPUKは武装部隊としてあるのではなく、彼らの意志でその場にとどまり活動しているだけである。彼らはトルコ国家や他の西側諸国、とりわけアメリカのイニシアチブの下で活動しているのだ。これが我々との間で「衝突」が始まってしまった原因だ。以後打ち出されてきた方針も、この状況によって定義づけられている。トルコ国家はこの点、すなわちクルド人が異なった立場、勢力をもって闘っているというところに狙いを定め、対クルド戦線を展開させてきている。

我々は、クルド人民同士が互いに相い差し向けられているという状況を克服することを展望して活動しているが、南部クルディスタンをトルコ軍攻撃のための出撃基地にしようとは考えてはいない。すなわち南部クルディスタンを北部の武装闘争のための軍事拠点とはしたくないということである。これが問題の本質である。

我々は国境付近における部隊配置を変更した。部隊をこのジレ・キャンプのある南東クルディスタンの国境へと移動した。

我々は今、自分の国にいるのだ。我々の人民、そして我々の国家の中にいるのだ。なのに「捕らわれの身」であるはずがないだろう。時間とともに、これはよりはっきりとすることだろう。

【Q】現在のPKKの政治的、軍事的な立場とは？ 北部イラクで包囲されたキャンプにとどまり続けるというのが目的ではないと思いますが。

【オジャラン】あのキャンプに封じ込められていたという報道は、我々に反対する勢力によって流されたものである。これらの勢力は、この4年に限っても「PKKはもうフクロのネズミだ」「PKKは解体した」なるデマを数多く流してきた。これはトルコ側が事実を述べてはいないということを物語っている。

実際に、この場所で我々は動きを封じ込められているわけではない。我々はかつてないほどに人民の中に迎えられ、クルド解放闘争において重要な位置にある。

【Q】多くの西側諸国では、PKKは「テロリスト組織」とされています。そして「クルド人＝テロリストPKK」という構図が描かれつつありますが、このような中、現在も武闘路線を展望しているのですか？

【オジャラン】我々が武装闘争を開始したとき、トルコ国家をはじめとする西側諸国は、クルド人やクルディスタンがおかれている状況など完全に黙殺した。当時存在していた社会主義諸国も、クルド人には何の関心も払いはしなかった。

このような中、我々は一步づつ闘争を前進させてきた。西側が我々に対して積極的であろうと消極的であろうと、特に問題ではないことだ。初期の段階にあっては自分たち自身しか頼るものはなかった。クルド人民の力がその解放を自らのものとして展望し、この基本的な理念の上に闘争を闘い抜いているということを我々は確信している。



解放闘争の未来を担う子供たち

【Q】1993年はどうなるでしょうか？

またPKKの闘いは？

【オジャラン】トルコ国家は軍事的、そして政治的にも退却の歩を進め、劣勢にまわるであろう。1993年、トルコ国家は地方においては民衆の信頼を完全に失い、都市ではその威信がどんどん低下していくことに脅える日々を送ることだろう。

戦争はトルコ国家やクルド問題になんら解決をもたらしはしないということを、私は最後に言っておこう。

歴史はくり返しはしないのだ。さらなる流血よりも政治的解決の道を我々は希望している。もしトルコ国家が戦争を継続するというのなら、我々PKKのもとに結集したクルド人民は、強固な闘いをもってこれに応えることであろう。



ドイツ赤軍派(RAF)3.30声明

ヴァイターシュタット拘置所

爆破攻撃について



過去我々の踏み出してきたステップでは、何も変革はもたらされはしなかった。ステップとは我々が必要とし求めていたものである。我々は下からの社会的反権力のうねりの中であって、また変革の革命プロセスが新たに提起されうるうねりの中であって、闘いのまっただ中に身をおいている。

これは様々な人々が、このプロセスへ向けた新たな基礎と共通基準を見いだす可能性を含めた議論を追求するものであった。これは資本主義による破壊的關係性といったものを変革していくための、新たな国際闘争に基づく重要な力となりうる。そしてこれはまた、社会的反権力のうねりの構築といったことも意味している。

このように我々は自ら、社会変革と同様に国際情況についても深く理解しておかなければならない。そしてこのプロセスは、深遠な議論が革命作風における支配構造をいかに克服していくのかという提起からなされねばならず、「(左翼内部における)旧来の観念の残滓を一掃するもの」でなければならない。唯一このプロセスを通じてのみ、闘争がとりうる形態や、その具体的な組織化の必要性についての問題に回答が与えられるのだ。このプロセスは以前同様、われわれにとっての最優先課題である。資本主義システムによる絶えまない破壊攻撃を目の前にして、これは必要性を増している。この資本システムは長きにわたって第三世界の疎外化、あるいは物質的／社会的な悲慘やそこから生みだされた数百万もの人々の死に責任を負っているのだ。

今日、資本システムにおける根本的な危機は、帝国主義本国で生活が破壊へと追い込まれ、物質的／社会的な悲慘がさらに多くの人民にとって現実化、具体化したものとなってつきつけられ、より多くの人民が資本主義システムの末路には絶望しかないのだということを自覚せざるを得なくなっているレベルにまで到達している。

こうしたなかであって、社会的勢力として何らかの選択肢が存在しないという悲慘な結果をもたらすこととな

ろう。社会におけるファシストや人種排外主義者の増加を(例えば難民に対して憎悪を煽るような悪辣なキャンペーンなどを通して)これを国家が防衛し、援護する一方、我々には隔離、解体攻撃といった妨害が加えられてきた。無数の、明確な矛盾としての攻撃であった。

昨年8月、我々は自らの歴史をふり返し、同時に未来の展望の土台づくりと、この数年間にわたっての議論の中で発展を勝ちとってきた思想的関心を表す、いわゆる「8月文書」を発表した。この中で展開された考え方は、我々がぜひとも取り組まねばならないと認識する議論の出発点でもある。当然ながらここに新たな問い掛けと関心の対象が生じることとなった。

「8月文書」に多くの反響が巻き起こったというわけではなかったが、我々はより広くさらに深遠な議論をおこなっていくことを希望している。

我々が女性解放運動への討論に過去、消極的な態度をとっていたということから、女性解放運動の中から批判を受けているのは認識している。これは人種差別排外主義においても同様のことである。そしてまた、例えばロストックなどの記憶に新しい事件等が次々に発生してきた中で、我々にとって討論、議論とは、より一層深刻なものとして取り組まれねばならないと認識している。

ここドイツでの人民の生活状況が今のように際立つ以前、あるいは政治勢力としての左翼が敗北し、より多くの人民が展望を失ってしまった現在の状況が訪れる以前においてでさえ、ファシストが台頭してくる可能性は充分にあったのだ。他方、ここ大ドイツ帝国主義足下で、なぜゆえに失望といったものが外国人に対して激しく転嫁されているのかという問題は、これが人民の中に深く、相当深く根をはっているかということからみても明らかである。だれもがこれを身近な問題として認識する必要がある。

「我々の国ではみんな貧しい。しかしその貧困を自分よりも貧しい者に転化しようなどと考える者はいない。」とモザンビークから来たある男性は語っている。

下からの反権力のうねりを構築するにあたって、人種差別についての議論は重要な点であり、これはゲッターやスラムだけの問題として限定されるべきものや、あるいは他人に押しつけてしまってよい問題などでは決してなく、むしろ自己の内実、そして自己がいかに社会変革を追求していくのかといった意識内部の問題とされるべきことである。

アウトノーメ/L.U.P.U.S グループは、過去彼らが出版した「人種排外主義の歴史とボート」という本を自己

批判している。本では次のように述べられている。

「はっきりとしていることは今日にも見られることだが、過去20年にわたって革命的左翼はこれら明確な人種差別—『ドイツ特有の性格』と闘うことを見落としていた…。男性支配の貫徹されている左翼内部の議論にあっては、『ドイツ性』という問題にふれることはそれほど大したことではないように思われる。我々にとってはこれはどうしようもないことだ」。

今日何らか違ったことや、何か新しいことを発見するチャンスは充分にある。下からの反権力の闘いの構築といった問題は白人やドイツ左翼だけのものとしてあるのではなく、むしろ共同のものとしていかに人民の生活が組織されるのかという問題でもあるのだ。ここドイツに住む人々は、様々な国籍や肌の色からなる人々で構成されている。

「黒人女性と対話をしようと思うのなら、はるか遠く離れた地まで赴く必要はない。ここドイツにも多くが暮らしているし、その方が容易かつ集中してできることだろう」。

「移民の歴史と移民の思考概念はドイツ社会を理解する上で重要である」。

（「Basta」—女は植民地主義に反対する）

1968年、それは西ドイツにおいて、ファシズムを追い越すことのできた左翼が自らの価値と文化と継続性を、生活にたち戻って捉え返すこととなった時であった。

「今日、ファシズムは再び到来した。そしてこのファシズムの前に左翼が社会的責任とその態度、そして価値を新たに提起していくことを投げ出してしまっている。これは政治／文化的な「真空地帯」の中で拡がっていくことだろう」。（RAF獄中兵士／ルッツ・タウファー）

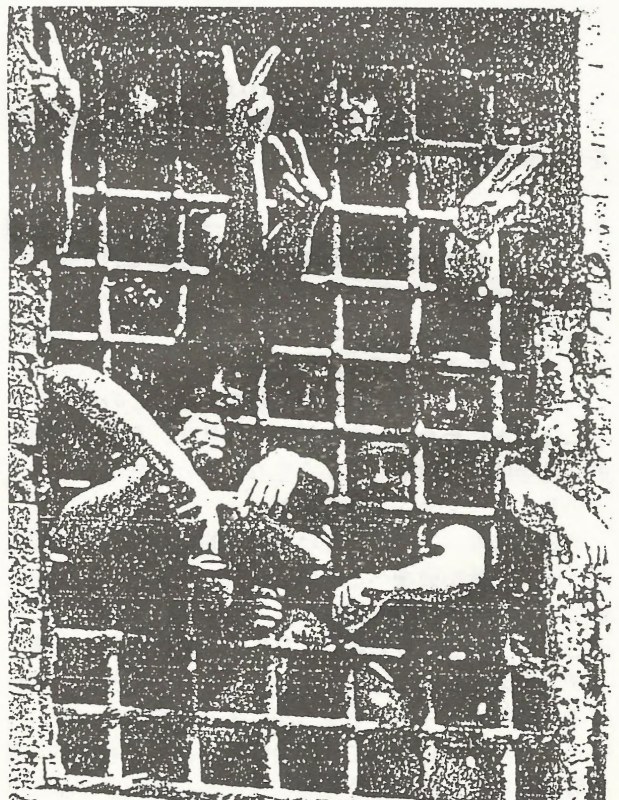
社会内で継続的に生産されるのは、植民支配 500年を通じて帝国主義本国でつちかわれてきた「人種排外主義イデオロギー」であるという現実。左翼にとって、その実感のもとに新たな価値と生活を見つけだすことは義務である。白人優位主義意識は、過去 500年にわたる第三世界民衆への植民支配、帝国主義搾取を生み出した。この意識は白人本国において、今も現実のものとしてその役割を果たしている。国家や資本は時としてこの危機的状況を、攻撃へと転化してくる。

人種排外主義とは、人を「異質な」、あるいは「価値のある／ない」をもって分類することである。資本システムにとって必要な者と、不要となった者を選別するためのものである。人民にとって社会構成基盤の崩壊は、人種排外主義の拡大に力を貸すこととなった。この崩壊とは人民が前進を勝ちとるのに 1日、24時間体制で闘争に身をおくということを意味している。資本主義システムの独裁によって人民は、その帝国主義国足下において最も効果的な形で自らの価値の判断基準を奪われ、そしてそれにかわって置き換えられる資本主義の根本原則に

隷属させられているのだ。これはいったい何を意味しているのか。例えば「仕事のない者など社会にとって必要な存在だ。」などとして人間存在の価値を定義づけてしまう姿勢とそれに対する労働の問題との関係を意味しているのだ。ほとんどのことがらがこのシステム下において、身体的問題ともからめて、いかに多く価値づけられているのかということを示すものである。また当然ながらここには、創造性や生活への願望などの入りこむ隙間などない。

これらの価値基準や数千にもおよぶ様々な分野をもって人民を分断固定化させることは、資本主義システム自身がつねに実践していることでもあった。分断とは「価値ある者／なき者」、「働くことのできる者／それをためらっている者」、「障害者とされる者／健常者とされる者」などのあいだに持ち込まれる分断である。

これら破壊へとつきすすむプロセスは今日、社会が内的な方向へ転化し、発展を成し遂げるといったある一つの局面へと到達したように思われる。排外主義意識と社会におけるその破壊へのプロセスは、唯一、社会状況と価値が提言され移行される闘いによってのみ変革されるのだ。革命的変革の展望は唯一、このようなプロセスの中でいずれの左翼も（—そしてまたこのドイツ、あるいは全世界において人間らしい生活を勝ちとるべく闘っているすべての者についても言えるが）、社会に深く結びつくことを考慮しながら新たな出発点に立つことが求められている。さもなければファシストが社会的イニシアチブをとっている状況はこのままでは変わりはないだろう。我々は下からの強固な運動を発展させるであろう。これは連帯と正義によって領導されたものでありこの冷酷な社会と貧困、そして理論展望の欠乏状態に対す



る闘争である。あるいは今や爆発寸前の矛盾がその凶暴性のもとに維持され、暴力がいっそう激化する中、それぞれ人民同士が対決させられていることに対する闘争である。

社会発展の問題、すなわち我々や他の多くの者によっても提起されてきた問題についての議論をするのに消極的な左翼が存在している。これらの者は自らを改良主義者として自覚しているようだ。革命的政治方針の再定義づけの問題にたちいたるなら、「革命派 vs 改良主義者」という形での議論は無意味である。これは、「永遠なる真理」をもってすれば今日の諸問題に対処できるとする議論についても同様である。と同時に、革命はインターナショナルであるべきと言うのも今さらありふれていることだ。東側、あるいは南に暮らす人民にとってこれらがなにを意味するということであろうか。

本来問われるべきものは我々の社会的反権力の闘いがいかにすればこの地で前進させることができるのか、またいかに我々の経験と発展が国際闘争の議論のなかで社会にとって具体的に一つの力へと移行しうるのかといったことであり、この意味で我々はもはや国際的組織化の一部として、「再方向づけ」を設定していくことはできないのだ。これはつまりそれが内包している実際の問題や皮相性という、まさにどちらをとってみても不合理でしかない問題であるからだ。いかに問題を選り分けるか（あるいは、問題にこだわり続けた方がよいのかといった点で、相手を定義づけすることに執着するのはドイツ左翼の「伝統」である）。昨年我々の4・10声明以後の議論のなかではっきりとしたのは革命的左翼も含めて、思想を「競合」させたり、ひとつの枠に「限定」したり旧来からの作風を頑固に守らんとする態度は、旧い左翼の残滓以外のなにものでもないということである。

そしてこれは現在いろいろとオープンになりはじめてから、やっとのことで変わりはじめてきている。

革命的政治路線の再方向づけをもって、人民は今、ひとつになりつつあり、組織し、行動し、互いに新たな考え方を学び自ら発展することを希求する存在へと変革しつつある。約1年前、我々が我々の側から闘いをエスカレートさせることを停止して以後、国家は体制下で政治的反対勢力として活動する者に対し抑圧攻撃を強化してきた。闘いで勝ちとってきた場から、さらなる地平を展望し、新たな道をさがし求める試みは、かつてないまでに強固にうち砕かれることとなった。

まず思いおこされるのが、G7/ミュンヘン・サミットに対して取り組まれた「サミット反対のサミット」である。この反対集会は、開始される以前から、権力による多くの妨害をうけ、「インターナショナル・ディスカッション」の開催は不可能となった。また現地でのサミット粉碎デモ闘争に対しても権力はむきだしの暴力でこれを完全に封じ込めんとした。反ファシズム闘争を闘う、いわゆる Antifa（アンチファ）各団体には「非合法化攻撃」がなされ、反ファシズムデモも昨夏、マンハイムでの事態を思い起こすまでもなく、徹底的に弾圧されている。反ファシズム運動活動家の逮捕、投獄は、台頭す



るファシスト勢力と明確に深く関連したものである。

支配階級は現在迎えている危機を様々な手段に訴え乗り切ろうと必死のアガキをつづけているが、何をしようともその行く末には矛盾の爆発があるのは目に見えている。矛盾とはすなわち社会解体状況や住宅難、失業の増加、鉄鋼産業や自動車産業における危機などである。ダイムラーベンツ社の大ボス、ロイターは今後30～50年にわたる危機の到来を予測している。この危機はすべて人民の上ののしかかってくるのだ。それと同時に国家には、大ドイツ帝国のための、人民に対する隷属報国化攻撃を強化させる必要が生じている。ドイツ連邦軍がイラクやクルドでの戦争行為に参加すれば、軍勢力としてのドイツの役割が、大ドイツ帝国にとって以前とはまた別の形で歓喜に溢れつつ要求されることであろう。白人である「ドイツ国民」が、支配階級や資本家の関心の下に、いつの日かこういった情況へと動員されていくといった点においては、人種差別主義とは若干異なった問題がある。外国人、難民、憲法/難民認定条項は「ドイツ人の問題」全体の問題である、と支配階級が人民の思考をつくりあげることは実はファシズム勢力を拡大させていくためのものであり、その計画はすでに組上に上って実行されつつある。昨年末ベルリンでの「人種差別反対デモ」などは明らかに支配階級によるニセ・キャンペーンである。このようにして国家は、ファシストの暴力や殺人攻撃に対し闘う多くの人民に照準を絞り、狙いを定めているのである。

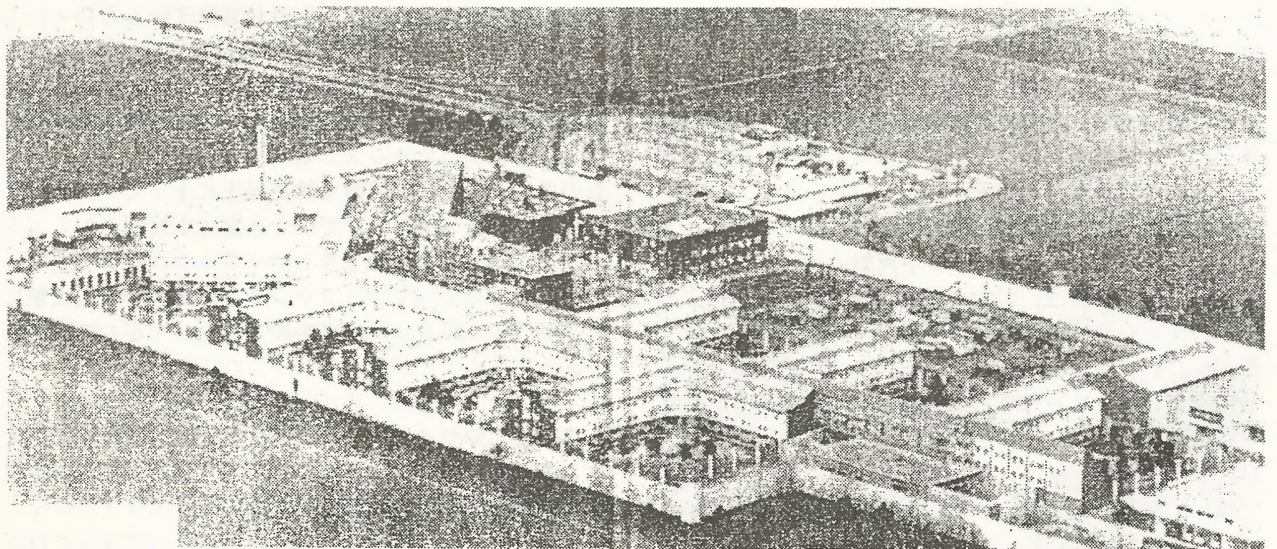
支配権力やファシストの攻撃に反対する者、抑圧下にある者がこの闘いを国際連帯闘争へと発展させるのを阻止せんがため、国家の側は数週間にわたるメディア・キャンペーンを展開した。これは暴力について語ったはいが、それは右翼の「暴力」と左翼の「暴力」を同列に

並べただけの、まさに悪辣なキャンペーン以外のなにものでもなかった。昨年だけでも外国人、「障害者」、ホームレスの人々が右翼ファシストによって虐殺されてきたという事実があるにもかかわらず首相コールは「右翼／左翼の両方の暴力に反対する『闘い』の必要性」を強調したのだ。(東欧の)国家／社会主義システムの崩壊にあれほど歓喜していた支配権力は、現在では冷めた対応をとるようになった。資本主義システムとその重大な危機の下、非人間的な計画、手段をもって最後のアガキをつづけてはいるが、克服することなどできないであろう。唯一、支配権力がおこなったこととは、左翼に対する『闘い』のみのようである。支配階層の利益に反するような、反ファシズム運動や反差別闘争で闘う者を勝利させてはならない、と彼らは考えているのだ。人民が人民自らの連帯を通して諸問題に取り組み、解決を模索する時、徹底した妨害が加えられる。この一環として国家は長きにわたって共産主義者として反権力闘争を闘ってきた者や反ファシズム運動活動家に報復の牙を向けているのだ。これはゲルハルト・ボイゲライン氏への弾圧、投獄攻撃の例にみられるごとく、今世紀に闘われてきた殆どすべての反権力闘争が抹殺さるべき対象となっている。またこれは獄中にいる我々RAFの同志に対する処遇強化などとしても見られることである。獄中の同志のことを第一に考え、我々の側から闘いをエスカレートさせることを一定程度停止すると決定した昨年4月の声明以後、我々は、とりわけ国家による獄中者の破壊、抹殺攻撃を糾弾してきた。我々は自ら闘争史の中でつねにステップを踏み出し続けてきた。この我々のステップとは新たな地平にたつ必要性を認識して出されてきたものであったのであり、国家による指図云々などとは何の関係もないことである。しかしながら当初からこれは、我々の側にプレッシャーを与え、つねに弱体化を狙う国家がどのように対応してくるのは非常に不明確であった。これが、我々が国家との間に限定つきで一定程度の回路を開いていた理由である。

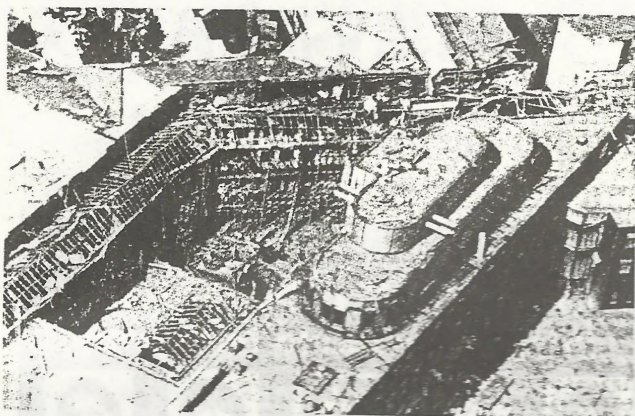
92年の「8月文書」において我々は次のように書いた。

「我々は将来的戦略としてではなく、一定期間に限定したものとして、武装を1つの回路として選択するだろう」。我々は短絡的に我々の元の状態に戻ろうなどとは思っていない。闘いをエスカレートする／しないは、さほど大した関心事ではない。しかしながらこれを我々はいつでも選択肢として保持しつづけているし、それだけの様々な手段、経験をもっていること、これは向こうの出方次第で決定されるという現実を彼らは認識しておかなければならない。我々が獄中者の問題から、革命的路線の発展をめぐる多くの仲間に疑問を生じさせることとなったのは反省せねばならない。しかし実際、我々のステップは、政治囚の解放という課題を我々がいかに国家との関係において重要に捉えているのかを思い知らすことはできた。矛盾に満ちたこの全体状況にあって我々は、この事実について、そしてこの行動について考えねばならない。我々は「真空地帯」にいるわけではないのだ。我々が我々の側から闘いをエスカレートさせるのを停止すると表明した後もクリスチャン・クラールに対しては、彼を仲間から分断、隔離することを目的とした新たな刑事訴追攻撃や、ベルント・ロシュナーの早期釈放延期措置、さらには今までの彼らの闘ってきた反権力闘争はすべて「自分の精神が異常だったため」と言わすためだけの「精神鑑定」を拒否した同志らに対して取られた「釈放不可措置」などに見られるように、国家は再び獄中の仲間への攻撃を強化したのだ。

獄中者には、再び討論のプロセスと社会に参加することを認めるのを許すような共同房への移監措置などがとられる可能性はおそらくない。そして釈放されるチャンスなど万分の一もないのだ。以前同様、彼らは破壊、抹殺攻撃にさらされ、隔離されていった。国家による抹殺攻撃が明らかとなった今、我々は獄中者問題に関して政治的決定を下す決意をした。国家の司法システムはこちらの政治的意志などお構いなしに、なりふりかまわぬ攻撃をしかけてきている。25年のRAFの闘いに学ぶ、連帯への議論や未来への意志決定の問題に関しては、い



3月27日RAFによって爆破されたヴァイターシュット拘置所の全景



完全に破壊されたヴァイターシュタット拘置所管理棟

まだ多くの問題が存在している。

変革のプロセスのための新たな提起、共通の基準から生み出されるこの議論はほとんど開始されてはいなかった。これらは疑いなく最も根本的なものであり、認識されねばならない問題である。我々はここをスタートラインにする。一例えば我々RAFの獄中の仲間に対して国家が22年にわたり隔離拘禁し、拷問攻撃を加えてきた現実との関係があげられる。

我々はRAFの獄中者の自由を目指し闘っているのだ。

我々は、この間彼らに起こったことが我々の満足するものではなかったために、次の戦略へと切り替えようとしているのではない。新たな提起を、新たに開始し発展させていくこと。これを22年ものあいだ投獄されつづけてきた同志の自由を取り戻すことについての課題と分けて考えることはできない。同志らは実に22年もの間、小さな房内で隔離され、孤立させられていた。もはやなんの戸惑いもなく、訴えねばならない。

「彼らはすべて自由とならねばならないのだ。！」

すべての政治囚解放の問題が、すべての左翼や意識的な人々の共同努力によって前進していくかどうかは、はっきりとしていることであり、これを再び方向づけていく局面においては強固な、そして自覚的な力とによって支配勢力に対置される形で、具体的な反権力闘争として構築されるものなのだ。

今日、我々、反権力を闘う側は非常に弱体化していると思われるため、誰もがこの状況をうけいれている。このような中で共同の関係性を変革する勢力をいかに構築していくのかを考えることなどではしない。

我々RAFは、カタリーナ・ハマーシュミット・コマンドをもってヴァイターシュタット拘置所に攻撃を敢行した。これにより、この拘置所でさらなる人民が、閉じ込められるのを数年間は遅らせることができた。この行動をもって、同志を捕らえている権力への我々の断固とした立場を表明し、国家に政治的圧力を加えた。

しかし同志らの自由を要求し、闘うことは我々だけの行動ではない。昨年は我々の側から提起をおこない、広く訴えてきた。残念ながら、行動を限定され、抑えこま

れていったラディカルな左翼の同志たちは具体的に実践に移すことはできなかった。拘置所攻撃という行動をもって我々は再び権力との対峙状況を強化させ、問題をより一層際立たせた。これは大いに活用されなくてはならない。

「ヴァイターシュタット監獄の閉鎖を要求する！ヴァイターシュタットは強制送還者を収容する監獄であり、そもそもそのためにこそ建設されたのだ。」

(シュツットガルト／スタンハイム監獄獄中者らによる
討論紙より— '91年9月)

ヴァイターシュタット拘置所は国家が公然かつ激化している矛盾にいかに対処せんとしているのかをみる恰好の例である。—監獄、監獄、監獄—さらに多くの人民が監獄に入れられようとしているのだ。—この監獄は国家の差別排外主義的収容政策の一翼を担う、強制送還監獄でもあるのだ。そしてこの監獄での投獄に際しての隔離、選別化システムの技術的完成度の高さは、他のヨーロッパ諸国のモデルともなっている。

ヴァイターシュタットはベルリン／プロッツェンゼー監獄と並んで、とりわけ女性に対する嚴重警備システムにより運営されるべく設計された。これは他方、ドイツにおける「最も人道的配慮の行き届いた監獄」という看板がつけられている。そこは高度な科学技術を駆使した獄中者の選別、完全管理システムが完備された監獄なのだ。ハイテクによる管理体制下、「協力」の名のもと獄中者に隷属を強要するのだ。ハイテク監視システムにはヨーロッパでも最も高価な高度技術が導入されており、監獄内は限なく監視の目が行き届いている。獄中者同士で連帯し、友人関係をつくったり、自分自身で何かを始めようと思っても、すべてコナゴナにうち砕かれてしまうシステムが完成しているのだ。「獄中者は選別のプロセスによって様々に『生活班』として選り分けられる。ここでは精神病学者が獄中者の望みを聞き入れ、あるいは反抗の度合いを微に入り、細に入りモニターするのだ。生活班にはヒエラルキーにもとづく人間関係が強要されている。ここでは非協力的な者には活動の制限が報復的に加えられる。『優良服役囚』のモデルを設定し、これへの『矯正』が、生活班を単位として強要されるのだ」。

(運動情報紙—「ブンテ・ヒルフェ」／ダルムシュタット)

この生活班制度の廃止を要求して、プロッツェンゼー監獄でハンスト闘争を闘った女性活動家は、次のように述べている。

「この監獄は、想像もつかないほどの高度な管理と抑圧によって支配されている。プロッツェンゼー監獄は、女性どうして連絡を取り合うのを妨害し、すくなくともすべてを詳細にわたって記録されるべくつくられたシステムのもと建設されている。生活班を通して女性が分断され、いかに監獄に従順かを観察される。各厳正独居房には女性を常に監視しておけるインターホンが供えつけられている。監内のあらゆる通路や在監者がプライベート

な時間を過ごす共同フロアにも監視カメラが設置されガラスのカベで囲まれている。いたるところで完全監視が貫徹されている」。

「人道的監獄」などというデマをもって、法務当局は他の監獄にいる囚人を「ヴァイターシュタットの理念」のもとに慣れさせ、服従させようとしているのだ。数年にわたって権力は、フランクフルト／プロイングスハイムの獄中者の要求を無視しつづけ、ヴァイターシュタット拘置所の「93年稼働開始」を強硬に押し進めてきた。

このプロイングスハイムでの、残忍なコンクリートのカベを解体するために起ち上がった彼らの要求への回答として、なぜヴァイターシュタットへの移監措置が決定されるのか。

彼らのヴァイターシュタットへの移監措置は、以前から決定されていたことだなどというのは何の理由にもならない。社会発展に対する権力の回答とは、より多くの監獄の生産であるのだ。（プロイングスハイムは閉鎖されるのではなく、改築されるだけなのだ）これにより、さらに多くの人民が監獄へと収容されることとなる。獄中問題の解決が、監獄の再生産という形で回答されてはならない。彼ら獄中者の要求はすべて受け入れられなければならない。

すべての監獄は解体されねばならない。

すべての政治囚に自由を！

すべてのH I V／エイズ獄中者に自由を！

すべての隔離拘禁房を廃止せよ！

プロイングスハイム、サンタ・フ、プロッツェンゼー、ラインバッハ、スタンハイム、ストラウビングの監獄で人間の尊厳をかけて闘っているすべての仲間に対し、我々はこの挨拶の言葉を送ろう。

国際的獄中者闘争連帯！

解放への道は、社会的変革のプロセスの一部として巡っている。それは変革へ向けた新たな国際闘争の一部でもある。

国家とナチ勢力による人種排外主義と対決せよ！

社会闘争における人民内部の差別排外意識を解体せよ！

— たとえその社会闘争が我々の求める、下からの大衆闘争であったとしても—運動内部の排外主義意識の克服は、連帯、正義、貧困と社会的隔離断絶に対する闘いや、展望の欠如の問題に深くかかわってくる問題だからである。

監獄なき社会を！

カタリーナ・ハマーシュミット・コマンド

Rote Armee Fraktion

1993. 3. 30

P.S 看守、そして司法当局のヒラ役人らの生命を我々が奪わなかったのは「戦術的選択」だとか、キンケルに感謝しなければ、などと言われているがこれはまったくのギマンにすぎない。

これらの役人どもが、ケガをしようと、死のうと、我々RAFの知ったことではないのだ。



RAF 獄中メンバーに対する 処遇強化攻撃

服役中のRAFメンバー／シンパらに対しては徹底的な処遇強化攻撃、追起訴重刑攻撃がなされている。（ドイツは一度無期刑が確定しても、追起訴であらたに無期判決がでると加算される）。

声明でも触れられているクリスチアン・クラールは昨年、追起訴をうけ、3度めの無期刑を受けた。この他アーデルハイド・シュルツ（すでに無期刑を2回受けている）、ブリギッテ・モーンハウプト（懲役15年×15回＝225年）、そしてヘルムート・ポール、イングリッド・ヤコブスマイナー、ジグリンデ・ホフマン、エバ・ハウレ、ドルフ・クレメンス・ヴァグナーらすでに長期間服役している者に対しても、新たな追起訴がなされる予定である。

ドキュメント

ヴァイターシュタット拘置所爆破攻撃



①



3月27日、午前1時10分、マシンガンで武装した4人のコマンドが、ハシゴとロープを使い、約6.5メートルの塀を乗り越え拘置所内に侵入。

②



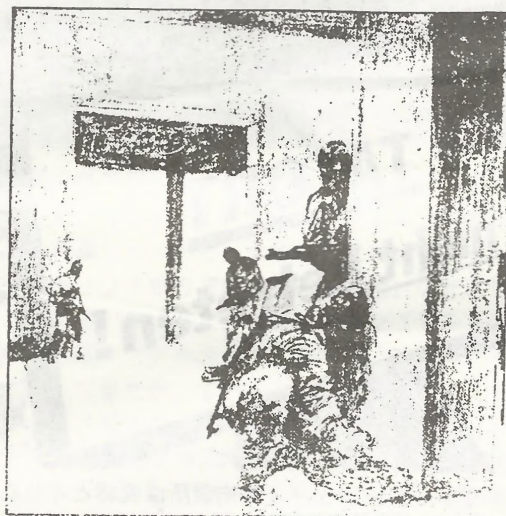
わずかの時間に構内に入ったコマンドは現場にいた警備官を捕捉、トイレに閉じ込め、中央管理棟をめざした。



③



リュックサックに入っていた爆弾を、各所に次々と設置。しかけた爆薬は合計200キログラム。タイマーを5時10分にセット。



④

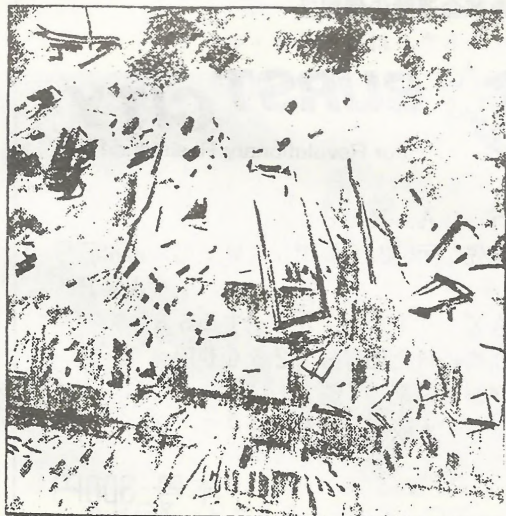


職員11人を縛り上げ、フォルクスワーゲンのバンに閉じ込め、拘置所外まで移送。コマンド部隊は、奪取したメルセデスベンツで撤収。

⑤



午前5時12分、2回にわたる大規模な爆発。ほとんどの窓ガラスはコナゴナに吹き飛び、破片の一部は約1キロ先まで飛んだ。爆音は、十数キロ離れたダルムシュタットの街まで聞こえた。



《 解 説 》

3月27日、午前1時10分頃、4人からなる武装コマンド部隊が、ダルムシュタットのヴァイターシュタット拘置所に侵入し、高性能爆薬（合計約 200kg）を管理棟の心臓部、コンピューター制御室を中心にして構内の数カ所に設置した。（他に構内の車にも設置している）。所内にいた11人の職員は、しばらくあげてバンに閉じ込め拘置所外へ移送した。コマンド部隊は別に用意していた車で撤収。爆破の際に、一般の通行人などをまきこまないようにするため、拘置所のヘイ（総延長約6キロ）の各所に「まもなく爆発、危険」と表示してきた。（これはウルグアイのゲリラグループ「ツパマロス」がよく用いた方法である）。

5時10分ごろ、大規模な爆発があり、中央管理棟や隣接する監舎が吹き飛んだ。政府はこの被害額を、約1億マルクと発表。拘置所は取り壊されるか、最低でも向こう6年間は使用不可能となった。

この拘置所はこのほど完成したばかりの新設拘置所で4月1日から稼働が予定されていた。特徴としては、囚人を選別し、分断して収容することを目的として特別設計されており、ヨーロッパでも最大級のコンピューター管理／監視システムにより、獄中者を24時間体制で管理する「ハイテク要塞」であった。（敷地総面積約10ヘクタール）3月27日当時は、警備アラームシステムはテスト調整中でスイッチは入ってはいなかった）。

RAFメンバー 特殊部隊により射殺される

6月27日、ドイツ北部メクレンブルク・フォアポンメルン州のバードクライネン駅構内において、ティートマイヤー大蔵次官（当時）殺害容疑などで指名手配中のRAFメンバー、ウォルフガング・グラムス、ビルギット・ホーゲフェルトが、内務省直属の対テロ特殊部隊GSG 9の待ち伏せ攻撃にあい、ホーゲフェルトは逮捕され、グラムスはGSG 9隊員により射殺された。

警察当局は当初、「銃撃戦による死亡」と発表していたが、目撃証言と検死結果さらにはGSG 9隊員の告白によって、転倒し武器を持たない状態でGSG 9隊員20人に押さえ込まれた上、頭部に銃を突きつけられ撃ち抜かれたことが明らかとなった。またこの時、「殉職」したとされる特殊部隊隊員も同じGSG 9側の銃弾を受けていることが判明した。

この事件について、同州検察当局は捜査を開始した。特殊部隊隊員に対する取り調べが本格化した7月4日、ドイツ政府のザイダース内相は、「部隊指揮に誤りがあった」としてコール首相に辞表を提出し受理された。野党の社会民主党（SPD）は、捜査指揮の最高責任者である連邦検事長の辞任も要求している。

今回の事件で、RAFに対するドイツ政府の抹殺攻撃政策が一層明らかとなった。



ヴァイターシュタット拘置所は廃墟と化した

世界の革命運動の情報紙

BURST CITY
For Revolutionary Resistance

★発行 A. R. P
★連絡先 〒606 京都市左京郵便局私書箱57号 ARP
★FAX 075-781-1253
★定期購読料 10号分 2500円
★郵便振替口座
大阪2-252923 ARP

本号 300円